

## ◎ 美術館情報

最新の情報は、各施設の公式ホームページなどでご確認ください。

### 1. 多治見市美濃焼ミュージアム【岐阜・多治見】([https://www.tajimi-bunka.or.jp/minoyaki\\_museum/exhibition-event](https://www.tajimi-bunka.or.jp/minoyaki_museum/exhibition-event))

◇4月19日(土)～9月7日(日)

令和7年多治見美濃焼ミュージアム企画展「桃山陶にみる 黒の造形」

日本の陶磁器の歴史はやきもの先進国であった中国にあこがれ模倣することで発展してきたといえますが、安土桃山時代の美濃では日本独自のやきものが作られました。室町時代に村田珠光によってはじめられた「侘び茶」は、安土桃山時代になると千利休によって完成されます。「侘び茶」で使われる道具も、それまでの唐物と呼ばれる中国の陶磁器から和物へと、志向が大きく移り変わっていきます。武士階級を中心に大流行した「侘び茶」は、そうした美意識の変化とともに新たな茶陶の需要拡大を生み、美濃において日本独自の美意識のやきものが大量に作り出されることになりました。桃山陶と呼ばれる志野、黄瀬戸、織部はこのようにして生まれたのですが、その中に瀬戸黒、黒織部、織部黒といった黒釉(鉄釉)を施した黒いやきものがあります。瀬戸黒は 1000℃以上になった窯の中から引き出して急冷させることで釉薬を漆黒に発色させたものであり、そこから「引き出し黒」と呼ばれました。形状は主に筒形のものでした。同様の技法を用いたものに、織部のデザインを取り入れ、瀬戸黒の形状を歪めて杓形にした織部黒、鉄絵を施した黒織部へと展開していきました。当館は当時の窯跡から発掘された陶片を多数所有しており、瀬戸黒、織部黒、黒織部の陶片を見比べると様々な試行錯誤が見られ、多様な器の形状や意匠がうかがえます。本展は「黒」をテーマに陶片や茶碗から美濃桃山陶の造形、意匠の多様さに注目しその魅力に迫ろうと思います。



◇4月19日(土)～7月27日(日)

企画展「収蔵作品展」

昭和中後期に作られた作品を中心に収蔵作品を公開します。出品作品の中には美濃を代表する人間国宝である塚本快示、加藤卓男、鈴木藏、加藤孝造の4人の作品があります。また、岐阜県重要無形文化財保持者の林景正、加藤景秋、玉置保夫、安藤日出武、市指定無形文化財保持者の中島正雄、加藤仁、青山禮三の茶碗、当時盛んだったクラフト運動に関わりの深い水月窯、知山陶苑、加藤摺也の作品、その他日展や伝統工芸展で活躍していた大橋桃之輔、加藤賢司らの作品といった当時の様子が分かる作品が多数あります。それらをギャラリーS1、S2の2会場に分け、ギャラリーS1では人間国宝4人の作品を中心に茶碗と香炉や花入れなどの小品を、ギャラリーS2では中型から大型の花器や壺などを展示します。1970年代前後の美濃陶芸の雰囲気を感じて頂ける展覧会です。是非ご覧ください。



#### <関連イベント>

- ・当館担当学芸員によるギャラリートーク 5月18日(日)14:00～
- ・陶片談義+抹茶体験 5月31日(土)14:00～ 講師:河合竹彦
- ・ワークショップ「器をつくろう」 1回目:成形 6月28日(土) 2回目:着彩 7月19日(土)  
講師:伊村俊見 費用:1,500円(全2回) 受取り:8月末
- ・中庭コンサート 7月6日(日)14:00～ 演奏:琴きらら

## 2. 大阪市東洋陶磁美術館【大阪・中之島】 (<https://www.moco.or.jp/exhibition/schedule/?e=621>)

4月19日(火)～11月24日(日)

特別展「CELADON—東アジアの青磁のきらめき」

青磁とは、微量な鉄分を含んだ釉薬をかけ、高温で焼くことで青緑色に発色させた陶磁器です。青磁は悠久の歴史を有しており、2世紀の中国で誕生し、その後発展を遂げながら朝鮮半島や日本をはじめ、世界各地へと広まりました。青磁は東アジアの陶磁の歴史において重要な位置を占め、その美しさは人々の憧れの対象となり、権威や富の象徴でもありました。青磁の大きな魅力はその美しい釉色にあり、焼成環境や胎土の色などによってもその色合いは微妙に変化し、青磁に多様で豊かな表情を与えています。中国では、青磁の美しさを表現するために様々な言葉が用いられています。唐代の陸羽『茶経』では越窯の青磁を「類玉」や「類冰」と称賛し、また唐代の陸龜蒙『秘色越器』の詩では、「九秋風露越窯開、奪得千峰翠色来」と記され、越窯の「秘色」青磁が山々の木々の青さを引き寄せたかのように讃えられています。一方、朝鮮半島の高麗時代の青磁は、その美しさから「翡色」(ヒスイの色)と呼ばれ、人々に愛されました。青磁は、欧米では「Celadon(セラドン)」という名称で親しまれ、その語源については諸説がありますが、17世紀のフランスの小説に登場する青磁色の服を着た人物の名に由来するとも言われています。本展では、当館コレクションの中から、中国や韓国の名品を展示するとともに、日本や近現代の青磁作品も紹介します。東アジアの陶磁の歴史において燦然と輝く青磁の魅力をご堪能ください。なお、本展とともに当館コレクションの代表的作品をご覧いただける<特別展示>と<コレクション展示>、さらに大阪・関西万博開催記念の企画として「大阪の宝—MOCOの宝20選」に選定された作品も同時にご覧いただけます。



## 3. 愛知県陶磁美術館【愛知・瀬戸】 (<https://www.prefaichi.jp/touji/exhibition/2025/special/moritacolletion/index.html>)

5月17日(土)～7月27日(日)

盛田昌夫コレクション寄贈記念

特別展「イタリアの磁器—リチャード ジノリのクラシックとモダン」

リチャード ジノリの歴史は、1737年にカルロ・ジノリ侯爵がドッチャ窯を開き、磁器を完成したことに始まります。イタリア芸術の伝統を守りながらも、時代を代表する芸術家やデザイナーらとのコラボレーションによって多くの名品を生み出してきました。本展では初公開となる盛田昌夫コレクションを中心に、18世紀前半の初期のテーブルウェアから現代まで、ジノリの名品をご紹介します。



## 4 兵庫陶芸美術館【兵庫・丹波】 (<https://www.mcart.jp/exhibition/>)

6月7日(土)～8月24日(日)

特別展 博覧会の時代 HYOGO 発、明治の輸出陶磁

国内外の博覧会への出品や輸出が大いに奨励され、陶磁器製造が殖産興業とも深く結びついた明治時代。兵庫県内でも出石や姫路、淡路、貿易港を擁する神戸などで海外に向け華やかなやきものが作られました。本展では、2025年の大阪・関西万博の開催に合わせ、博覧会が盛んに行われた時代に県内で作られた輸出陶磁に注目し、その諸相を探ります。

